



Large calligraphic characters on aged paper: 天 (top), 德 (middle), 丸 (bottom).
A wooden slip with smaller calligraphy: 丸 (top), 日 (middle), 全 (bottom).
Faint characters on the slip: 尾, 奇, 証.



笠を長途のふくむころのぼろ衣に
と浦りく農あつにまききり
傳はつたるいふ人あはく河に
おほえん字らむの相寄れは去
國ノ一ノのハナハナ

世の中侍る

相方かゝれ身を行高し侍る哉
あまやとびはらの心茶 苑 野水
有明のさかほをたつとく 荷
のしられ露をもちふあつむす 重五
朝鮮のほろり くらまはらひまき 杜國
日よらしく した野さくまを川 正平

芭蕉

けいふもたはるにせふにわりのゆく
髪もやまの志のふ身のりも
とりめのしと氣を志の先
かえぬとすことなく
新法カケのあつと火を結く
ありしとらんくさるカライ杜園
田中野こもんの柳ありく
霧くさる人ハらんも
那水

恨 簾
きくを接するは月夜 杜園
とあつた所より居る
この花を清く水のさ
蝶をむくはるり 鼻の
のりおは簾透ぬわりの
いよそ眼もあつた声 前
ぬす人の記念の松は吹おけ 芭蕉
あつた家紙は名を付し 水 杜園

笠ぬき髪を無髪にめし
みあらしをきくひり唐言
志しと砕けしを人の骨の何
鳥賊ハるひよの國にらるひ
あそれされ謎もことごと
秋水一斗しもつては夜え
日東の李白の坊よ月夜えて
中くも程をなす心琵琶打
荷

ししのたもつぬるれ夕に
箕一熟の奥にいまも
わのいのりあなをい早も
まふをいしれまゆいひ
綾いよ居湯く志の花源て
廊下を藤のうけし

おのの壯年
まを振る

塾水

とくをよむしと禱るる

雲くまこりる露乃 食 杜國

野葉ゆきしぬる蝶のぬおれ 芭蕉

くくちり秋とらまひきり 荷兮

麻呂の月神、羯鼓をある人 重五

桃花のまよとら貞徳の 寫 正平

るこゆる 深き川の田原ありて 杜國
奥のまはらうらや 只なまをくわ 禁水
床あましく 寝まをいとなる男 荷
縁さゆきけれ 恨このうら とき
口かしく 痛まをちるる 地のかま 水
明りまをい 軍にふび 送あま とき
かこたう 益さう 寄ひく 飛 とき
月をまのれ 牡丹 守人 杜國

繩あみのがわらわ ぬき落し とき
ふりく ぬき 地花切所 荷
初るれ 若き 女 嫁のいのか 杜國
ふ 路い たら ね とき あり 由 軍 時
櫛くこに 餌まのう 福や あり とき
く ぬき 起し 家 智と あり 軍 道 とき
藤あ のく 梢を 掃れ 帯さ あり とき
三線か した 不破の とき あり

乃すうらゝゝて打守ら奉とある芭蕉
祇さ免くのとてを 七十 杜
奉かめ次は夢く重うらめいふ
ひの川の傘れ下舉あさる 荷
蓮池く路の子あふ夕もる 杜
おどにふつう 荷 荷
月くきとら唐輪の燈れ赤桂て 荷
急ちめこの臨濟もあ川 急

秋柳もん 虚く 荷もく 芭蕉
荷の實つふふ系 ありあり 辛
後より現をひらき心の手に 芭蕉
花より典侍の肩の内侍の 杜
こころれ 鸚鵡尾ふのれきいふ 芭蕉
一 荷のこころ 芭蕉の荷活あり

つえぢひく事儘く

十歩

はつ原の月より落す露の糸 杜園

水 このりゆき 水の糸 つ 重五

菫原の糸と初穂人 た 野水

山の門を た あま た 芭蕉

馬糞 か あま た 風の糸 た 荷分

茶花 た 湯者 た ち た 人の糸 た 正平

死くちまけく物も娘のくちまけ
燈籠あつひのなまらふらふら
つゝの森のすほふか茂撰りれあき蕉
蕎麥さく青く流質系カラキの坊即水
初月夜双ふらの猿おとく杜玉
みま買カみらにほまほまほく荷
志はあゆのあまそと雛と作の居る野水
急峰のあまのあまんとすま

あうりまては浪の氷くうれ行 荷
佛喰ちまら真解ホトまき 守り 芭蕉
縣あるくれんひんひん也作の秋くま
又形カ莖ケまら 高六 又とく
くまにあにあにあにあにあにあに
真屋の馬り種あつこのり也 野水
あうりまては浪の氷くうれ行 荷
急峰のあまのあまんとすま

捨しふる柴舟長くの云つん那水
晦日とさむく刀賣る年一重
雪のね呉越國の笠免つらよ荷
襟しる雄の片袖とさくえきを
あし人と持哉棺と春中と人
芥子のふくく必とさむる弾。杜玉
三月月の東を暗く鏡の輝。萱
株湖のひくく琴のよと者好あり

意取り花ゆりてまどと紋子。杜
祥よの事念佛教をさつら荷
あけしすまの燈さしに起健く野水
あふいひの川も夜家の帯引。あま
あられ飛たす。お花れうらまこ入荷
そのるまらり哉家もたれくま

なふ波はしあゝ火鉢を
こゝろをさるゝ

重五

淡膏をそのすくを思ふ

ひもほね振飛と鏡磨寒サム荷カ

花棘馬骨の雲く咲るサ杜國

鶴ツルるるまをれ月ツキあすあ梨リン野水

の海吹也杜のツ瓶に酒サケあさアサ白シロ芭蕉

決ツク減ヘるるるル花ハ市チ振ヒりリ羽ウ登ト

質茂川や胡麻千代赤り微も 尚
いそらの聲なりけり ぬるる 色
たふふと布操舟こころし 野水
く華をさくらん 花越る三平 杜園
捨られくつねらる 鶯れ離れ 田笠
火をのぬ火燧をく人と見え 芭蕉
門守の翁に成り子よりく 寂の 芭蕉
血口く次月の晴きり 尚

魯りて本邸の録七行 杜
ふゆまの納豆きく 中水
くぬく泣橋の徳とよそに 芭蕉
僧とのいそ次歎き 春 野
白燕溜めぬ山 ぬと洗ひ 岩
宣言がくく 釵と録 芭蕉
八十年とよそに 童母のらて 那水
なうづらもむる七夕のつ 杜

西菊小枝はこれのほかに
蘭のあふらふ 卜あふらふ 芭蕉
船名家へ買取らぬとて
釣籠に葉を何ふりのれ 荷
くやあましく 撫子なる 正月小 杜玉
津波子向る 舟をさるま 中水
寅乃かきと 貝と 蝦治れ 急起と 玉
香かひりよ 菊 系 の 地 羽衣

いづれかして 雅とて 美人の像 荷
涙くさく 涙のまじり 舟の松 雲
粥す 縁あつたよ 花ふかき 舟
羽衣のト 控ふを 風 芭蕉
水あつたよ 簾か ちりく 舟
秋まゝの 夢と 青らむ 白 杜玉

田家眺望

荷

柔月や鶴のいそあしひめて

冬に物りたあしれなりのあや 芭蕉

櫻檜ふ家の体よまればあはれ 重五

ひまはるししれ塩とあはれつ 杜國

音をぬき具足ふ月のうすく 羽笠

酌とら量あま切 楚水

秋のころ猿は連歌いよりの芭蕉
歌くこれ等一室にありて寺 荷方
舞として椿は花の落る音 杜若
茶小糸遊戯うむる風の香 芳名
雉道に烏帽子は女ふ三 十 那水
度しよ未方作らるゝの落衣 那水
西の山橋小はらりん 荷方
麻うりといふ舟の集 あり 芭蕉

江をとりて獨不菴と世に捨て 芭蕉
家月出の身をわがわらひ 杜若
あまの衣帯を落る花を打拂 那水
箆輿ゆるは本尻のふあひ 那水
骨殖をくちまふ洞をくちまふ 芭蕉
乞食は養をこころふ志の免 荷方
泥の足に尾を引鯉を捨るは 杜若
師幸小逢むるれみせり 那水

ふたつら年々小角豆の花はしりか
賞をよめうに炭團はく 白 聖
赤子あまれ小坊交り小打むか 荷
おれくまののみまら蓮は實を意
志川のふ飯堂のそく日のおま
衆とくまの風やのめよ 杜
物持し屋根われまら所庇 相
豆腐腐つりてぬまら妻く 入 那水

え改る者れ彼を破りし
依りま幅の袴くれとら 白
いらぬま男描ひら成拾きて 樹
春の志らすれ雪くまらま 雪
水干と秀白の聖りや 白
山茶花白ふ笠れこの 雪

遊如

おん

いふふりよと 花面しと 川敷
樽火しあふらふれらるの 松花
さくさく川下志に 髪とちや けんと 雲
檜さふまを 庭のし 朝露 木
船り 塔かりん 月無 海 芭蕉
ひらひら 小橋を さらけ 破阜 山 榎水

貞享甲子歲

京寺町二条上六町

井筒屋庄兵衛板

天
心
正
氣
壯
萬
節
剛
直
不
可
屈
也

天
心
正
氣
壯
萬
節
剛
直
不
可
屈
也